



第73回“社会を明るくする運動”作文コンテスト  
小学生の部 鹿児島県推進委員会委員長賞(最優秀賞)



## ほっと安心できる居場所



鹿児島県・霧島市立天降川小学校・五年

よしなが あい  
吉永 愛

私の家の近くに、「社会を明るくする運動」と書かれた看板があります。その看板を見るたびに気になっていましたが、ずっと深く考えたことはありませんでした。でも、今回夏休みの作文のテーマの一つに、「社会を明るくする運動」と書かれていたので、思い切って、お母さんに聞いてみることにしました。

「お母さん、社会を明るくする運動って、どういうこと。」

と、聞いた私にお母さんは、

「人と人が支え合って、ほっと安心できる気持ちを広げていく運動かな。」

と、答えてくれました。よく分かったようなでも、きちんと分からないような複雑な気持ちになったので、インターネットで調べてみました。

調べてみると、「保護司」という聞きなれない言葉が出てきました。保護司は、生きづらさに寄りそい、安全で安心な社会を実現できるよう、心を支えてくれる人。そして、犯罪や非行を行った人の社会復帰を目指して、温かく受け入れてくれる人だそうです。すごい仕事だなと思いましたが、保護司は民間ボランティアで、なり手不足と高齢化が現在、深刻になっているようです。

鹿児島県内では、約八四〇人が活動していますが、二〇三一年までに、四百人以上が定年を迎えると、新聞に書かれていました。家族や友達からの信頼を感じられず、自分を大切にできなくなることで、犯罪や非行をしてしまう人たち。そんな人たちを救うためにも、もっとたくさんの保護司がいたら良いのにな。と思います。

私のお母さんは、毎日何十回も「大好き」と言ってきました。だきしめてくれる時もあります。小さいころはそれがうれしかったけど、今では恥ずかしいので、私はよく「やめて。」と言います。お父さんはよく、「愛はお父さんの宝物。」と言います。そう言われると、私はうれしいような恥ずかしいような変な気持ちになります。でも、今回この作文を書くにあたって、私はお父さんやお母さんに大切にされ、愛されているんだ。と思えるようになりました。そして、お父さんやお母さんのおかげで、私にとって「家」がほっと安心できる居場所なんだと気づきました。これは、当たり前のことではなくて、とても幸せなことだと改めて思いました。

犯罪や非行は決して許される行為ではありません。でも、もし育ってきた環境が違い、自分のことを受け入れてくれる仲間や家族がいたら、心が安心し、犯罪や非行をおこさないかもしれません。学校や地域、家庭にきちんと自分の居場所がある人は、心が乱れたとしても相談できる人がいます。逆に、居場所がどこにもなければ、何もかもが嫌になり、悪い方向に進みそうになっても声掛けしてくれる人が居ないので、ついつい犯罪や非行に走ってしまうかもしれません。「自分は大切な一人」だと思い、人と人とが支え合い、つながりを感じられる社会を作る。そして、ほっとできる居心地の良い空間を作る。一人一人が明るい未来を想像し、そのために何ができるかを考え行動に移していけば、社会全体が明るく平和になると思います。誰一人、犯罪や非行を起こさない社会ができるように。みんなが笑顔いっぱい暮らせる社会が来るように。そして、みんながほっとでき、一人一人の居場所がある社会になるように。

今すぐ、私は保護司になって活動することはできませんが、友達を支えたり、つらい思いをしている人の気持ちを受け入れたりすることはできます。お母さんが言っていた、「人と人とが支え合って、ほっと安心できる気持ちを広げていける運動」が大きな輪となり、社会に広がっていくことを私は願っています。